

## 塚田満江著『半井桃水研究 全』

芦谷信和

本書は大別して研究論文、覆刻、解題、紀行・エッセーの三部門から成り立っている。

以下に目次を紹介する。(本書の目次は最下位項目に「I」「II」「III」……等の漢数字が付されているだけであるが、便宜上最上位項目に「I」「II」「III」……等のローマ数字、中間項目に「I」「2」「3」「e」……等のアラビア数字を使用する。)

- I 半井桃水の人と文学 1 序説 韓文化の智——雪・月・花の原点として—— 一、序に代えて 二、新羅の雪 三、高麗の月 四、李朝の花 2 桃水人名考 3 桃水の人と文学 一、誤解された桃水像 二、泉太郎の風土 三、「伝」と「記」の国 四、記者生活へ 五、特派員第一号 六、半井桃水の文学 七、語り部の終焉 4 桃水、晩年の文学——比較文学の方法に拠る—— 5 天台禪と半井冽 6 半井桃水年譜考
- II 半井桃水作品研究 1 桃水痴史著『朝鮮胡砂吹く風』考 I 2 『夢幻』考——『九雲夢』との比較—— 3 桃水痴史作『胡砂吹く風』考 II 4 半井桃水作品年表
- III 覆刻・解題 1 『雞林情話 春香伝』 2 高麗大藏本『春

香伝巻集』 3 (解題A)『雞林情話 春香伝』をめぐる 4 (解題B) 高麗大藏本『春香伝巻集』 一、「伝」の成立 二、「巻集」の調べ 三、再び桃水の風土受容と教養 5 半井桃水文学覚書き

IV 半井桃水研究補遺——比較文学資料として—— 1 「観人・居住」と「観光・留学」——漱石とイギリス覚え書き——

2 夏目漱石文学試論——「観人居住」を手がかりに——

V 半井桃水の周辺——比較風土・比較文化資料として——

1 半井桃水と京都 2 半井桃水と韓の国 3 二十七年目の

韓国 4 春香伝発祥地 5 対馬島の花 6 韓・いぎりす連環記 7 新羅(Shinra)へ 8 耽羅(Tamra)へ 9 パンソリ

とシャンソン 10 ユーカラのくにの花と 11 津和野 12 南

紀・吉野 冬の旅 13 三熊野詞考 14 丹波の海は青かった

15 比叡山さくらと叡山すみれ 16 「見残しの涙」と「大菩薩峠」

17 西国紀行 18 少将滋幹の母 19 賢治文学紀行 20 『銀

河鉄道の夜』(宮沢賢治作) 21 繁栄の谷間で 22 ノルウェー紀

行 23 花同じければ実もまたひとし 24 イギリスの樹林

25 ストラトフォード紀行 26 ふたたびスコットランドへ 27

ピトロクリー印象 28 対馬(Tamra)ふたたび——あとがき

代えて——

桃水は新聞小説欄の開拓の先頭に立つ人であり、そこに偏見、誤解、曲解を受けやすいところがあったという(p.8)。この「誤解と偏見」を正すことが、本書の目的でもあろう。

本書は五百五十ページを越す大著である。しかも連想によって叙述が発展してゆく場合が多い。「周辺」にはしばしば、『論考』にさえ、「遊び」が入るのは、食、衣、住文化生活に一貫する中世花郎道の「遊楽」「古代の神遊び」精神ののつとつたまでであり、「Play」なくして、文字文化といえども解明したい」(P.23)という著者の自覚に基づいているのである。また著者の桃水に対する愛情と思入れはきわめて深く、そこからくる情熱の筆が、しばしば論の根幹をそれで、筆を走らせたところも見られる。そういう部分にも著者がぜひ論及しておきたかった論点が多い。このような本書の形態上の性格から論題と照らし合わせて、章節ごとに論点を要約紹介することは、困難を伴なうことが多い。また本来それぞれ独立した論文が収録されているため、論点の重複が各章節にわたって見られる場合もあるので、ここでは本書の方法論的特徴の観点から、I「半井桃水の人と文学」中の3「桃水の人と文学」を中心にして、I-IIIを関連させながら、論点を紹介することにしたい。

本書の特徴はまず第一に韓(かん)の文化との比較文化論的、比較風土論的な性格にある。すなわち桃水の人と文学を韓文化の智を基盤としたものと見、彼我の風土の比較の上に桃水文学の側面を捉えたものである。その比較の方法は単に文章あるいは着想等の比較ではなく、異なった民族の文学をその地の人と共に生きるように理解することから始まる。そこには衣住文化に対する食文化優先の態度が一貫しており、食文化としての薬味、薬草、薬種の採用、

処方の背後に流れる韓人(かんじん)の文化思想、窮まりない生命への愛を見ることが探られている。

以下本書の比較文化、比較風土的視座による韓文化の桃水への影響に関する要点を述べておこう。

桃水の人となりは対馬の風土と半井家の家系が培ったものが支配している。対馬は耶馬台国と李氏朝鮮半島を繋ぐ位置にあり、高麗、李朝期の慶尚全羅南道との深いかかわりが桃水の精神面を深く支配した(P.26・40)。

韓文化圏の騎士貴族道ともいえる「新羅花郎道」は、桃水の精神と行動を支配した。名家半井家の高貴の血をひくという自覚は、少年期の桃水に俠骨の武士たらんとする「花郎道」に根ざす美意識を植えつけ、それは十六歳の田舎書生(明8)から十八歳叡山をめざし、二十二歳までの京都生活を経て、大坂朝日新聞釜山通信員、さらに同特派員第一号となった明治十五、六年にかけて発揮された。桃水の文学はこの「花郎道」実践を主題としたものである(P.40~41・42)。

海神(水神)への崇拜と尊敬は海に囲まれ水に飢えた対馬人にとって切実であった。漕四郎(父)、泉太郎、成人後列(れつ、のちにきよし)、桃水、源次郎、のち浩(毛)などの名にこめた思いを見ることができる。清水、清泉(薬水)への異常なまでの信仰は古代から朝鮮半島に伝わっており、半井の姓の由来は、井戸水を貴重な薬水とする韓来医術の伝承が、藩主宗氏に受け継がれた事実を示すものと考えられる(P.32・34・41~42)。

泉太郎十代の愛読書としての『史記列伝』『唐詩選』『三国志』『九雲夢』などは、全編が漢字体の宗一族の学問対象であると同時に、韓土族の教養書でもあった。鎖国下であって、表向きの典医(御番医)職としてのみならず、事実上対朝鮮外交官として釜山倭館に常駐した半井家代代の必読書は、これらの漢籍であり、半井家長男泉太郎は韓文化の知識教養をも身につけたp26、27・42・43)。

桃水を名乗る前に「千壺」の雅号がある。壺・甕の陶磁器は朝鮮民衆の日常に不可欠の食糧貯蔵の生活器具である。漬物用甕の数によってその家の貧富の差が明らかになる事情は、「千壺」を名乗った貧しい辺境落士の総領の悲願を知るひとつのよすがと思いやられる(p30)。

対馬民謡や晩年の桃水作詞作曲の長唄・端唄・小唄に残る哀調は、韓の地との深い関わりを伝えている。桃水晩年と終焉の地は高麗の人と文化の渡来の地であり、晩年の桃水が愛した俗曲は、朝鮮渡来文化の影響を受けたものである(p27・71・74)。

『春香伝』の「伝」とは民間口承説話、つまり広場の唱語である。『春香伝』は十八世紀李朝肅宗期の全羅南道南原を発祥地とされる。説話「春香伝」として三大伝中の代表であり、原作者はわからない。高麗末から李朝中期にかけてその詞曲は謡い語りつがれ、漢字を書くことを許されない広大(語り手、唱者)が常民のための文字、諺文で覚え書きを記した「巻集」である。広場の唱語(パンソリ)に聞き入る聴衆に政治権力への諷刺の意欲を呼びさ

まし、抵抗の意志を盛り上げるのが、古伝の実体といえる。桃水が実際に見聞したのは、李朝期の唱語であった。『九雲夢』『春香伝』等の韓の常民「守節」のうたものがたりは桃水に強い影響を与え、その「守節」の意志は桃水の意識を支配した。李朝世宗期に作られた常民の文字諺文はもとより『三国史記』等の古代中世朝鮮史に委しい泉太郎が、広大、花郎の詞曲をよく知るのは当然のことである。健康で聡明な「守節」の烈女という点はすべての『春香伝』に共通している。全巻に溢れているのは、全羅南道の料理、家具、衣服、装飾などを含めた職能の誇りの歌である。それらは桃水の堂々たる体軀と豊かな知性を養ったものにはかならない。桃水は、翻案の底本としたと考えられる説話体女文字の『春香伝巻集』の写本を、釜山街頭で入手した。発祥地の南原から鷄林八道に謡い語り継がれて百年後のことで、この写本が現存最古の京版本である。李朝下五百年の土風人情の理解と幼少期から享受した「伝」が、桃水に翻案の筆を執らせた。桃水訳が世界最初の訳である。半井家代代の教養を総領として叩き込まれたとはいえ、声音、容姿の他に韓来文化を受容し、自らの表現の糧とする能力は、やはり桃水独自の稟質であった。隣邦の土風人情を祖宗の代から心身に刻み込んだところから、「史」と「詩」を含む「詞」の訳は正しく深く表現された。『雞林情話 春香伝』(明15・6・25、7・22『大阪朝日新聞』)の翻訳は朝鮮の土風人情の一斑を日本人に知らせようとしたものである。文化の中の「詞」を文学に読み取る方法からは、当然政治と思想のない「詞」は文学とは考え

られない。そういう中華伝来の文学観を評価の基準とするならば、近代性を韓の国に得た最初の翻訳文学が桃水野史訳『春香伝』であった。翻案に見られる韓の国の名所案内、職能の理解、土風人情、史実と、訳者の知識教養の広さを示すものは、到るところに見られる（P15・40・43・44・45・47・48・49・80・108・109・238・239・240・243・246・247・257・259・267）。

亀浦事件（明14・8）、壬午の変（明15・7）に際しての政治的活躍と報道は、桃水の国際感覚の豊かさ、韓文化への深い理解と愛着を示しており、ジャーナリスト桃水を語っている（P50・52・109・110・111・112）。

桃水痴史の作品の背後には韓文化の「詞」がある。日本近代文学の一角にひとり桃水文学に限って、女性も「守節」の美をもって飾られている。『胡砂吹く風』（明24・10・2・25・4・8『東京朝日新聞』、明25・12・26・1・2金桜堂、続胡砂明28・1・17・4・25『東京朝日新聞』）は「九雲夢」を下敷きとしながら、泉太郎、冽の九つの夢を本格的に再構成している。その山岳風景には比叡山横川、天道茂、韓の南岳、北岳の地勢が用いられており、葉草の知識は作品構成に使用されている。香蘭に見られる常民「守節」の「儒礼」は、李朝期に国教となった中華伝承儒礼史を知悉した桃水ならではの描けぬ世界である。仇討は「儒礼」に悖る行為とされている。「儒礼」に基づく「復讐の倫理」は、自他共に「敬天愛人」の礼節を守る仁徳であり、善意があれば、いずれ悪意を克服し得ると信ずる樂觀が、韓の「列伝」と『胡砂吹く風』に共通の「明」の文体を自

ずと造型したのである。林正元はどんな悪徳の人間に対しても、捕えて法の裁きを受けさせる余裕と節度を見失わない。「花郎道」の詩たる所以である。香蘭を暴徒から救う栗本中尉は壬午の変で戦死した堀本中尉であり、血も涙もある武士の一人として描きとめられている。高宗期の李朝政治史、日韓外交史に知られる金玉均、朴泳孝ら親日開化党貴公子たちの名は、金松筠、朴貞孝などに変えられて登場する。日清戦争の口火となった日本壮士たちによる閔妃殺害事件、いわゆる乙未の変（明28）前夜の不穏情勢下に暗躍する奸臣汚吏や奸商賊子、実際の見聞を踏まえて、それぞれの典型として描かれるところは、江戸戯作の善玉悪玉の類型をはるかに越えている。烈士、烈女はパンソリに語り継がれているものである。林正元が鄭内官を討ち果たす場面は、広大複雑は高官邸内の構造を知悉している作者によって、追真的に描き出される。『胡砂吹く風』の林正元と『続胡砂吹く風』の元義達とは生国を異にししながら、共通する混血の血が血筋をかけて育て上げた儒・仏・道の象徴として語られるところは、構想、スケールの広さ、裏付けとなっている韓兼文化受容吸収の深さからも、大河小説としての風格をもっている。内には閔妃、大院君が権力交替を繰り返し、外には仏・英・清・露・日の対立葛藤の渦巻く十九世紀の韓国政治史、社会史をつぶさに写し出す手腕は、もはや伝奇娯楽読物の範疇を超えて、朝鮮民族興亡史記ともいえる様相を現前する。桃水文学は、征服欲に支配された常民の歎きの声を、社会の底辺に聞きとった、いわば抵抗諷刺の文学である。それは

まさに耐忍温和の韓民族の声なき抵抗の声を背景としたものであった。『九雲夢』を書いた金万重、『謝氏南征記』の金春沢は、桃水痴史に重なる(P 56・57・58・140・143・144・145・148・170・172・178・181・184・185・186)。

以上のように本書は比較文化、比較風土の方法によって全篇を貫いている。そうしてこのような本書の根幹の性格を作り上げたものは、著者の知的発育の基盤が桃水と同じく朝鮮居住にあったことに基づいているのである。

次に本書の特色は半井家の血筋、経歴と桃水の文学とを関係づけて論じている点に見られる。これを著者は半井家の「史記列伝」と呼んでいる。以下半井家の「史記列伝」と桃水文学との関係について論ぜられた要点を述べておく。

半井家の遠祖和氣清麻呂の曾孫時雨が菓草葉学の知識に委しいところから、長く朝廷の典葉頭をつとめ、多くの門下生を養成したことに青年泉太郎の叡山志向が加わり、京洛の地を目ざす動機となった(P 33)。

父湛四郎、泉太郎二代の「詞」を語るものに『春一枝』(明20『絵入自由新聞』、明24・3今古堂)がある。『花あやめ』(明23・6・11・7・20『東京朝日新聞』、明25・6今古堂)『舞扇』(明29・5・19・7・21『大阪朝日新聞』)のうち、前者は『春一枝』と同様に桃水の人となりを知る上で重要であり、後者はやはり半井家の血筋を語る興味深い長編である。『舞扇』のお京の謡と舞曲は泉太郎と同じ観世流で、時に『胡砂吹く風』に描かれた幼少期の林正元、

つまり泉太郎自身を思わせる。前半の五条坂老舗街や鳥原史には『花あやめ』の長崎丸山とともに花郎桃水遊樂の地としての詩が語られている。『胡砂吹く風』『統胡砂吹く風』『下闇』(明24・7・5・8・26『東京朝日新聞』、明25・12金桜堂)『鬼芒』(明29・10・1・12・2『東京朝日新聞』)には文中、湛四郎、泉太郎の半井家三代の「史記列伝」が彷彿される。林正元の外国留学には尺振八藝を目指した泉太郎の実体を見ることが出来る。李田千賀の半生は香蘭、芙蓉のそれに写される。商業資本の要求に屈する桃水痴史自身の苦痛は、杖刑の拷問に悶える春香、賊のかこいものとなり、官婢となりさがっても、正元への愛を貫いた青楊の生に投入される。桃水痴史が構築した俠骨の武士は、殺伐蛮勇を退け、医業と宗教を一体とした智・仁・勇兼備の人物であり、そこには医を仁術とした半井家三代の血筋の影がさしている。痴史作主人公の父は大方討死、謀殺、斬殺等の非運に仆れている。その復讐を果たし、父の遺言に従う孝子たるのが、主人公の意志的行為のすべてであるが、それは桃水母方と父方の血筋の混淆・葛藤によるものである。その作は母藤へ贈る孝子の「巻集」であり、永遠の恋人成瀬元子(正妻)、を含めて、非業に世を去った知己友への鎮魂歌でもあった。『濡衣』(明33・9・18・11・10『東京朝日新聞』、明39・5・1日高有倫堂)『遺物の軸』(明34・3・20・5・25『東京朝日新聞』)には国分、竜田一族の「遺事」「外伝」が垣間見られる(P 52・60・87・88・114・115・116・117・118・119・120)。

以上が半井家の「史記列伝」と桃水文学との関係についての所

論である。

今まで見てきたように、韓文化との比較文化論的、比較風土的論究の態度および対馬半井家の血筋とその来歴の桃水文学への影響の論述が本書の顕著な特徴、視座、要点である。だが、その他にもいくつかの優れた論点が見られる。以下それらの論考を略述しておく。

まず「天台禅と半井冽」は天台禅および同系修験道を視座として、その桃水文学への影響を見て独創的であり、とくに初期の作『開化の復讐』(明21・1・5『絵入自由新聞』、明24・3今古堂)『海王丸』(明22・11・26、12・29『東京朝日新聞』、明24・2今古堂)以後『下閣』『鬼芒』に到る間、一貫して変わらぬ主人公雪冤の方法を「摩訶止観」に求め、また桃水自身が関係した亀浦事件、壬午の変、甲申の変(明17・2)に際しての記者としての報道活動や身命を賭した政治活動に、天台禅の鎮護国家の実践を見る点などは光彩を放っている(P50・51・85・90・91・93、95)。

また「夢幻」考——「九雲夢」との比較——において、従来小宮山天香作とされてきた『夢幻』(明27・9・18、10・30、28・4・26、5・28『東京朝日新聞』)を桃水の人と作品の幅広い調査に基づいて桃水作としている論(P192、193)や、『花あやめ』『舞扇』などの作品解釈にも異彩が見られる(P54、55・59、60・64・65、66)。本書は著者の博覧強記ぶりを示している点に、その特長を見ることができるのである。

著者の桃水に対する思い入れは並々ならぬものがある。それは

泉太郎冽に著者自身に通ずる韓文化の享受を見出したためであろう。それが著者の主観を内から支え、ともすると実証性を欠く場合がある。著者の情熱が燃え上るとき、日本文学やその代表的作家、国文学、国文学者への批判の鋒先はそれらを片端から斬りにする。著者の立場からはそうなるのであろうが、性急な批判は説得力を減殺することになりはしないか。

作品に作家を読み取る作家論の方法は、本書では作品研究にも及んでいる。桃水の人と文学を追究することが、本書の目的であるからであらうが、作品の形象の分析、検討が充分でないきらいがある。例えば「半井桃水年譜考」で、桃水の『忠臣蔵』評の史実を重視する主張を引用して、『大石内蔵之助』や『由井正雪』を「余人をもつて代え難い」作者による歴史小説、伝記小説であると、桃水の歴史小説、伝記小説を『モンテクリスト伯』に匹敵する大著であると論定する箇所などは、その一例である(P122、133)。作者の論評は作品評価の傍証にすぎず、それが作品の上にかに周到に表現されているかを分析検討せねばならない。作品評価に際しては、「何を」とともに「いかに」を検討する必要があるが、本書では前者の研究に比し、後者が不十分なことがある。このことに関して言えば、今日目にすることの容易でない作品がほとんどであるから、作品本文からの引用や、場合によっては筋の展開を示して(主要作品にはなされているが)、作品分析や論の展開にするのが親切であらう。

「半井桃水年譜考」に見られる「推命学」は、著者の博学が感

じられるとしても、それへの信頼が作者の成長に心理的影響を与えるであろうことは考えられないではないが、それを研究に組み入れることには首肯しがたい（P99～102）。

なおまた本書の性格から、これを読み易くするために「半井家系図」「半井桃水年譜」「索引」が欲しい。とくに「索引」はそれによって事項を補い合つて読むことができ、ぜひ必要であらう。

「半井桃水研究補遺——比較文学資料として——」「半井桃水の周辺——比較風土・比較文化資料として——」については、本書が、韓の地で人となつた著者が、身をもって吸収した実体験を通しての論考であることに基つき、そしてそこにこそ本書の特色があることから、その報告という意味で重要ではあるが、研究書では客観化して論証し、エッセー・紀行文は別冊にした方が、研究書としての純粋性を保てるのではないかと考える。

本書は、半井桃水という、一葉の恋人であり、一葉に影響を与えた二流、三流の通俗的新聞小説作家と見られ、纏まつた研究としては、塩田良平博士の『樋口一葉研究』や昭和女子大学発行の『近代文学研究叢書』第二十五巻で取り上げられたにすぎない対象を、はじめて独立した研究対象として採り上げ、比較文化、比較風土の広い視野に立つて追究した最初の研究成果である。

著者にはすでに黒田しのぶ名による『半島の少女たち』（昭53・10吉村書房）『イギリスの花は赤かった』（昭55・1吉村書房）『古都住みの記』（昭56・8吉村書房）『壺中の花』（昭75・3吉村書房）の紀行文・エッセー・詩と童話集がある。これらはすでにライフ・ワー

クの一つ『半井桃水研究 全』のための礎石でもあった。そうして一葉研究としての『誤解と偏見——樋口一葉の文学——』（昭42・9、中央公論事業出版）もまたその重要な礎石の一つであった。本書においても、一葉は一見して桃水とはまったく違った分野にその文学を築き上げたように見えながら、一葉文学が桃水その人とその文学から受けたものが意外に深く大きかつたことを各所で述べている。すなわち「大つごもり」の山村石之助、「にこりえ」の結城朝之助などには「花郎道」の影がさしている。「闇桜」「経つくゑ」に見られる「春香伝」の影響、「やみ夜」のお蘭や「にこりえ」のお力や「別れ霜」の新田のお高や「五月雨」の侍女お八重には「守節」が見られるが、一葉は桃水への愛着からは結局その「守節」の真意を理解しえなかつた。また半井の家系と泉太郎十代列二十代の「ものがたり」が一葉の作品に投影しており、「たけくらべ」の「大黒屋」「大音寺前」の背後には京都半井家の「史記列伝」が垣間見られることなどが述べられている（P39・41・48・49・68・103・104・117・118）。一葉を常に念頭に置きつつ、桃水を論ずるのも、本書の一特徴である。著者は桃水研究を踏まえて、さらに一葉研究の増補改訂版を執筆中であり、近い日のその出版によって、著者のライフ・ワークは輪を閉じることとなる。その完成を期待したい。

〔和紙特装私家愛蔵限定版 昭和六十一年五月三十一日発行 五六一ページ 著者塚田満江 京都女子大学名誉教授 発行者黒田しのぶ 現住所 〒006京都市左京区松ヶ崎西桜木町一三〕  
〔中央公論事業出版製作 〔丸ノ内出版発売 〒100東京都千代田区丸の内二一四一 丸ビル五階 振替東京六一四〇二六七 定価一万五千元（二共）〕  
（あしや・のぶかず 本学教授）